P-101
東邦大学病理剖検例を用いた過去56年間の侵襲性真菌症動向と加齢との影響について

○若山幸1、下平佳代子1、中山晴雄2、篠崎滋3、大久保陽一郎1、篠井大智1、石渡聡1、野玉1、橋本直文1、長谷川千花子1、密田恵1、根本哲生1、洗谷和俊1
1東邦大学 医学部 坂本病理学講座、2東邦大学 医学部 小児科学第一講座、東邦大学 医学部 神経外科第二講座

P-102（SS2-1）
当院における剖検例解析から得られた深在性真菌症の変容

○梅野高輝1、久米光2
1北里大学医学部血液内科学、2北里大学病理学部

【目的】2002-2005年に新規療法が発表された前の北里大学病院における剖検例をレトロスペクティブに解析し、さらに臨床的観点から解釈することにより、深在性真菌症の予防・治療に結びつく知見を得ることを目的とした。
【方法】1999年1月より2001年6月および2001年1月より2001年6月までに北里大学病院における剖検例を解析した（死後率は除外）。著者が検討した重篤例を中心に深在性真菌症の病態観察の可否、抗真菌薬投与の有無と開始時期、基礎疾患、肝機能減退症の期間、免疫抑制薬使用の有無、使用抗真菌剤をレトロスペクティブに解析した。
【結果】深在性真菌症が確認された症例は、1999年に262例中16例（6.1％）、2001年中170例中21例（12.4％）であった。起因真菌度数は一部重篤、それぞれCandida属が6例（23.2%）、7例（42.9%）、Aspergillus属が9例（34.5%）、5例（29.4%）であった。
上記基準による重篤真菌症は16例中9例（56.2%）、21例中10例（47.6%）であった。
【考察】山崎らや久米らによる深在性真菌症の全国統計が4.5%台であることにより、本解析では若干多かった。剖検例は低下しており、死亡率をどれだけ反映しているかが問題となるが、前回の検討が困難である場合には変わりはなく、継続的な解析は有用であると考えられる。

P-103
病理剖検例における深在性真菌症の疫学 特に白血病症例に関して—日本病理剖検総報— 第52輯（2009年度）—

○鈴木裕子1、大戸歯1、梅野富輝2、東原正明3、久米 光4
1福島県立医大、輸血移植物生産学講座、2北里大学医学部 血液内科講座、3北里大学医学部 剖検症候学

P-104
剖検例を用いた腸管真菌症における疫学的および病理組織学的検討

○藤崎恵1、中山晴雄2、大久保陽一郎3、篠井大智4、村央 五郎3、根本哲生1、洗谷和俊1
1東邦大学 医療センター 大森病院 腸管病部、2東邦大学 医学部 腸管病理学講座、3日本大学薬学部 分子細胞生物学研究室

対象と方法：日本病理剖検総報第52輯（2009年）を用い、病理剖検例3,178例のうち、特に白血病症例に注目して比較検討した。
結果と考察：3,178例中633例（4.59%）に真菌症を合併、白血病および骨髄異形成症例（以下L-群、剖検症例643例）では、199例（30.6%）および95例（16.3%）、非白血病症例（以下NL群）同様に高頻度に真菌症を合併していた（p<0.001）。L群真菌症例の年齢中央値は67歳で、NL群と比べ若かった（p=0.0003）。また、重篤型は、63例（63.6%）と半数以上であり、その内訳は、NL群で23例（21%）、L群で22例（18%）で、後者で多かった（p<0.001）。
L群の単独症例91例中でAspergillus属52例（57.1%）、Candida属22例（24.2%）、Zygomycetes属（以下Z属）5例（5.5%）であった。また、病理組織学的剖検例では、気管支、肺組織の切片を用いた。}

まとめ 1）NL群と比べ、真菌症の合併頻度が高が、従来の報告よりは減少している。2）我々の溶血性真菌症の予防、臨床的動向の向上によると考えた。2）真菌症の合併頻度が高が、我々の疫学的動向の予防、臨床的動向の向上によると考えた。3）非売価物質に特異的真菌症の報告がみられた。